



Title	移動とともにある再チャレンジ : アマゾン流域部の 日系ブラジル人の事例から
Author(s)	山本, 晃輔; 中島, 葉子; 児島, 明
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 229-261
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72131
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

移動とともにある再チャレンジ

アマゾン流域部の日系ブラジル人の事例から

山本 晃輔

大阪大学未来共生プログラム特任助教

中島 葉子

岐阜聖徳学園大学教育学部准教授

児島 明

鳥取大学地域学部准教授

要旨

国家間の移動は、子どもたちや若者にとって単一拠点で学習できないことや、アイデンティティ形成を阻害するとして「機会喪失」や「リスク」として捉えられがちであった。しかしながら、日本での生活経験を有する日系ブラジル人の子どもや若者が、ブラジルにおいて様々な資質を活かしながら活躍する姿が明らかになっている。教育環境が比較的充実している日本ではなく、ブラジルにおいて「再チャンス」を掴む若者の存在は、単一国での永住を念頭とする教育を相対化するための格好の事例であろう。そこで本稿では、日本での生活経験を有する日系ブラジル人の「再チャレンジ」を検討することから、今日的な移動する人びとが形作るトランスナショナルな社会空間を考察した。

調査の結果、アマゾン流域部に帰国した若者の再チャレンジは、かならずしも帰国先での実践として完結するのではなく、さらなる往還へと開かれたトランスナショナルな実践として展開されうることが明らかになった。さらに、歴史的な経緯を有する「日系資源」が、トランスナショナルな実践としての再チャレンジを現実 に即した仕方で下支えしているという事実が明らかになった。本研究を通じて、移動に身をおきながらキャリア構築を試みる日系ブラジル人の若者の可能性、そして移動が日本社会の内部に存在し続けてきた歴史と生活の重要性を指摘した。

目次

1. 課題の設定
2. 分析の枠組み
3. 調査地の概要
4. 〈場〉としてのアマゾン流域部
 - 4.1 日本移民が切り開いた〈場〉
 - 4.2 デカセギが構成する〈場〉
5. 移動とともにある生活―日系ブラジル人の若者の「再チャレンジ」
 - 5.1 アマゾン流域部に暮らす若者たちの将来展望
 - 5.2 日本での経験と望んだわけではないブラジルへの移動
 - 5.3 ブラジル帰国後の再チャレンジ
 - 5.3.1 ブラジルの学校を通じた再チャレンジ
 - 5.3.2 再渡日経験と再チャレンジ
 - 5.3.3 再チャレンジを支える日系資源
6. 考察とまとめ

キーワード

ブラジル日本移民
日系ブラジル人
デカセギ
トランスマイグラント

1. 課題の設定

日系ブラジル人による「デカセギ」は出入国管理及び難民認定法（以下、入管法）の1989年改正（1990年施行）を背景に急増した。2008年に経済危機を経て日系ブラジル人の帰国が大きな話題となったが、現在もなお191,362万人（2017年末：前年比5.8%増）が生活している。そして今日の労働力不足を背景とし、日系ブラジル人の「デカセギ再募集」が日本・ブラジルにおいて行われており、2018年7月より日系4世までのビザが発給される運びとなった。

この数年で日本とブラジルの環境は大きく変化しており、とりわけ2016年リオ・デ・ジャネイロオリンピックを前後に、ブラジルでは経済不況と政治混乱が生じている。日本では労働力不足が深刻化し、日系ブラジル人の再渡航促進政策が議論され、その結果、ブラジルからの「再デカセギ」が地方部において企図されるようになっていく。ブラジル各地で日系人の「再デカセギ」希望者が増加するなか、デカセギを斡旋してきた旅行会社も再開業されている。日本政府や経済界を中心にデカセギの再呼び込みもはじまっている¹。経済危機から約10年が経過し、再びデカセギが日常的なものとして感じられるようになった。

職業斡旋を行う企業・旅行会社、安価な航空券の誕生やインターネットの発達、日系ブラジル人の移動を促進・加速させてきた。国際移動をよりミクロに見たとき、人びとの移動理由は就労だけではなく、移民がもたらすフィードバックがその後の移民の意欲を高め連鎖を生じさせることが知られており（MacDonald and MacDonald 1964）、最初期の日本へのデカセギは、「日本では稼げる」というポジティブなフィードバックに強く影響されて生じたものとみることができる。そうであるならば、ネガティブなフィードバックから、デカセギ就労は押し留められることもまた予想される。

ブラジルで生活する日本移民・日系ブラジル人をみたとき、日本へのデカセギは経済的なリターンの大きさから議論されてきたが、滞在時の就労の厳しさやブラジル帰国後の生活の難しさが知られている（Tsuda 2003; 小内編 2009）。それでもなお、ブラジルのデカセギ斡旋業者には多くの履歴書が届けられ、日系人は日本へ渡ろうとする。なぜ、かれらは定住ではなく「移動のなかで生きる」ことを選択するのだろうか。日本側の要請だけでなく、ブラジル側でも「日本

に行くしかない」ほどに、ブラジルに帰国した日系ブラジル人の生活は厳しいのだろうか。

近年、日本での生活経験を有する日系ブラジル人の若者の地位達成・教育達成について、ブラジルにおける長期間にわたる調査がみられる。たとえば、日系ブラジル人は、複数国をまたにかけて生活しており、こうした「ゆきつもとどりつ」の経験が、若者にとってリスクというだけでなく、進学や就職の機会を得るケースがあるという（児島他 2014）。また、南米の中心都市サンパウロにおいて、両国の経験を有する若者の資質を高く評価する〈場〉の存在が明らかになった（ハヤシザキ他 2015）。年齢＝学年とならないブラジルの教育環境や諸制度の充実が、日系ブラジル人の若者の移動経験の資源化を可能にしていることが指摘されている（児島・中島 2015）。

国家間の移動は子どもたちや若者にとって単一拠点で学習できないことや、アイデンティティ形成を阻害する「機会喪失」や「リスク」として捉えられがちであった。そうした側面もあるだろうが、日本での生活でチャンスやチャレンジの機会を得られなかったと位置づけられがちな日系ブラジル人の子どもや若者が、ブラジルにおいて様々な資質を活かしながら活躍する姿にも目を向ける必要がある。

本稿で検討する子どもたちは、日本滞在中、さらにはブラジル帰国後に慣れない生活地を生き抜こうと苦心してきた。いずれも家族の移動や生活状況によって強いられる「チャレンジ」であったといえよう。そして、ブラジルで若者へと成長したうえで、定住を決めるのではなく移動を視野に入れた「再チャレンジ」を自ら選択している。教育環境が比較的充実している日本ではなく、ブラジルにおいてチャンスを掴もうとする若者の存在は、単一国での永住を念頭とする教育を相対化するための格好の事例であろう。本稿では、日本での生活経験を有する日系ブラジル人の「再チャレンジ」を検討することから、今日的な移動する人びとが形作るトランスナショナルな社会空間を考察する。

2. 分析の枠組み

移民研究において、同一集団にカテゴライズされる人びとのうち、どのよ

うな人びとが移動するかは経済的な状況だけで説明することは難しい（パートベック 2014）。そのため、社会参入するための障壁の度合いに注目した研究（ポルテス・ルンバウト 2014）や、出発国・移動先国の移民政策だけでなく、エスニックコミュニティの有り様などが相互に関連していることを指摘する研究（Kivist 2005）など、なにが移動を「押し出し」「押し留める」かについて、今日も様々な研究が積み重ねられている。

では、日系ブラジル人の若者にとってなにが移動を「押し出し」「押し留める」ことになるのか。山本(2014)によると、ブラジルに帰国した子どもたちは、「大学進学」が将来の生活拠点を決める大きな契機になるという。ブラジルでは柔軟な学校制度など、「再チャレンジ」のための教育環境が存在しているが、大学に進学しなければ就職が難しいという現実も併存している。そのため、大学進学が難しくれば、ブラジルで働くよりも日本で生活することを選択するケースがある。同様に、本稿でも検討するが、若者たちは日本への「デカセギ」を将来展望から排除していない。デカセギ1世代目と違い、日本での生活経験を有する若者にとって、同じブルーカラー労働者になるならば、ブラジルより日本のほうが「まし」という論理は、両国の賃金格差や為替レートの違いを鑑みたとき一定の説得力を有する。

「デカセギ」とは、人びとの国家をまたにかけた往還のプロセスの一部である。ブラジル日本移民は1908年にはじまった「出稼ぎ」戦前移民と第2次世界大戦を挟んだ戦後移民があり、日本からブラジルへの移住や、日本人の「帰国」は戦前戦後を通じて継続的に行われていた。ブラジル日本移民（日本人）、日系ブラジル人、日本帰りの日系ブラジル人等々、日本とブラジル間における「出稼ぎ」「デカセギ」とは、一度きりの移動と永住というものではない。さらには世代を超えて継続することで、トランスナショナルな社会空間を形成してきた。トランスナショナルな社会空間の特徴とは、出身地・移住地にまたがる重層的な社会関係（Basch, Schiller and Szanton-Blanc 1994）であり、記憶・アイデンティティというだけでなく、同時代的なネットワークがもたらす膨大で最新の情報が移民らの生活そのものに強い影響を与える（Basch, Schiller and Szanton-Blanc 1994; Kearney 1995; Levitt and Schiller 2004）。「どちらかの国」だけでなく「どちらの国でも」あるいは「どちらでもない場所」で生きる日系ブラジル人は「トラ

ンスマイグラント」と呼びうる存在である。

だとしても、移動する人びとの生活は、当該地域の政治状況や経済状況に大きく左右される。ブラジルにおいても、資源が豊富な南部州と経済的な厳しさがある北部州ではそまの生活条件が違うからである。したがって、トランスマイグラントとしての経験や資質が資源化しにくい地方部においては、トランスナショナルな社会空間というだけでなく、生活地における固有の〈場〉に応じた生活戦略が必要となる。そこで、日系ブラジル人のトランスナショナルな社会空間における生活を検討するため、本稿では2つの課題を設定した。

第1に、ブラジルにおける「再チャレンジ」がどのようなものなのかについてである。〈場〉に応じた移動があるとすれば、南部州のように、日本企業や日系人が多数生活する〈場〉のほうが日本での生活経験を有する若者にとって身につけた技能が活かせる。実際これまでの先行研究が扱ってきた地域は、豊富な資源を有するサンパウロ州都市部・周辺部を検討・分析してきた。そこで、本稿では北部州において事例の検討を進めたい。

第2に、トランスマイグラントであっても、「再チャレンジ」をした後、ブラジルで大学進学しホワイトカラーとして就職、定住することが望むべき達成なのか、という議論を検討したい。この論点は、トランスナショナリズムに依拠する教育研究が、結局のところひとつの国、ひとつの地域での円滑な社会統合に議論が帰結しがちであるという点に起因する。この議論を敷衍したとき、日系ブラジル人の「再デカセギ」についても、「大学進学」できず「デカセギ」せざるを得ない人びとの「負の行為」として捉えることになりかねない。

これらの課題に応えるため、本研究では、ブラジルに帰国した日系人の若者の教育や就労について、アマゾン流域部での調査データを分析する。サンパウロが南米随一の国際都市として発展する一方、開発の途上にある地方部の給与水準は最低賃金であることが多い。以下でも見るように、州としての経済的基盤も貧弱である。地方部よりこれまでの日系ブラジル人研究を検討することは、日系ブラジル人の若者の全体像を把握していくためにも必要な作業であろう。ひいては、「移動とともにある生活」の実相をより明確にできるものと考えてる。

3. 調査地の概要

本稿の調査地であるパラ州はブラジル北部に位置する。面積は約12億km²とブラジル最大の領域を有する。16世紀にスペイン人がアマゾン流域部を探索、1616年にポルトガルがベレンに要塞を築く。その後、ポルトガルの植民地経営の中心的な都市であるベレン市を中心に、熱帯雨林の生い茂る奥地へと開拓が進められた。サンパウロ市からベレン市まではおおよそ2,400km。アマゾン川に面した熱帯都市である。

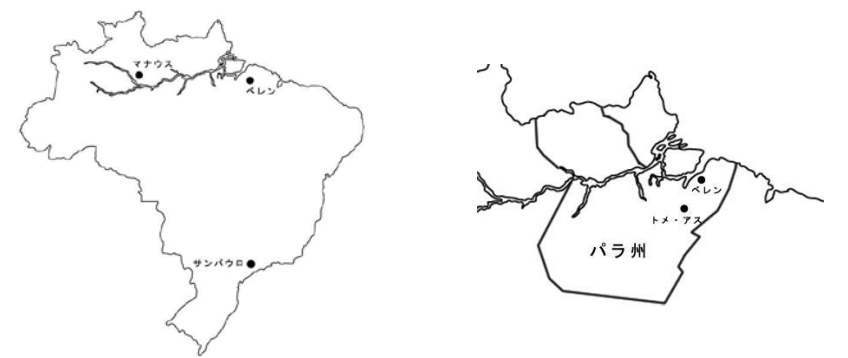


図1. パラ州の位置関係及び、ベレン、トメアスの位置関係
サンパウロまで直線距離で2,400km、マナウスまで直線距離で1,200km、ベレンとトメアス間は移動距離240km。

本稿の分析データは、2017年3月にパラ州ベレン市・トメアス町における現地調査によって収集した。アマゾン河口部に沿うように広がるベレン市は経済の中心地である。旧市街地は植民地時代の名残からヨーロッパ風の建築が並び、中心街はビルやショッピングモールがある。トメアス町はベレン市から200kmほど熱帯雨林を進んだところに位置する。唯一舗装された道路の両側に家屋が立つほかは、農地と熱帯雨林である。

ベレン市とトメアス町は、次節で説明するように日本人移民が多く生活する町である。また、ブラジルに設置されている8ヶ所の大使館・領事館・領事館事務所²のうちのひとつ（領事館事務所）がパラ州にあるのも、その歴史的な経緯から、日本政府からの経済的、人材的支援が行われてきたからである³。本

研究では日系7団体、デカセギ経験者による自営商店2件、そして5人の若者のインタビューを分析の対象とする。団体へは日本もしくはブラジルで直接アポイントをとった。若者は現地で生活する日本人を通じてアポイントをとった。若者インタビューの対象者は、いずれも日本での生活・教育経験を有する。両親のどちらかがアマゾン川流域部で成長し、その後日本へデカセギしている。なお、全てのインタビューは日本語でおこなった。これはサンパウロ近郊と違い、1世の移民が多いことや、日本語が継承されているためである。山本(2014)や児島・中島(2015)を参考に日本での生活やブラジル帰国後の生活を尋ねる質問項目を作成し、半構造化インタビューを実施した。いずれも1時間から3時間程度のインタビューとなった。インタビューは録音され、トランスクリプトを作成し分析データとした。

表1. インタビュー対象者の一覧

	インタビュー対象者
ベレン	日本領事事務所 領事
	汎アマゾン日伯協会 日伯協会会長、日伯協会副会長、トメアス文協会長
	アマゾン日伯援護協会 援護協会事務局長
	越知日伯学園 校長
	バラ-日系商工会議所 A副会頭、B副会頭
	デカセギ帰国者商店(オーガニック商品) オーガニック店店主
	デカセギ帰国者商店(日本食品) 食品店店主
	帰国した若者インタビュー(5名) ミゲウ、エレナ、ラウラ、サムエル、マルセロ
トメアス	トメアス文化農業振興協会 トメアス文協会長
	トメアス農業共同組合 農協理事

4. 〈場〉としてのアマゾン流域部

4.1 日本移民が切り開いた〈場〉

1616年にポルトガルがベレンに拠点を構えてからは、本国からの移民に加えて、先住民や南アフリカからの奴隷が植民地の経営に関わった。19世紀後半からゴム系産業が興隆しブラジルの主産業となっていくが、アジア圏との競争に負けたこともあり、以降は経済的に厳しい状況にある。パラ州の人口は約830万人と全国でも上位に位置するが、労働環境は劣悪で所得は低い。サンパ

ウロのように比較的気候が温暖な南部州の開発が進められるなかで、北部州の開発は遅々として進まなかった。

表2. サンパウロ州とパラ州の各種統計

	人口	名目所得	人間開発指数 (HDI)	16歳雇用率	初等教育 入学者数	高等学校 入学者数
サンパウロ州	45,094,866(1)	R\$1,733(1)	0.783(2)	72.4% (3)	5,330,730(1)	1,850,513(1)
パラ州	8,366,628(9)	R \$708(25)	0.646(24)	32.5% (25)	1,475,087(5)	359,978(9)

括弧内はブラジル27州における順位 出典：ブラジル地理統計院 (IBGE)
人口：2017年 名目所得：2016年 HDI：2010年 雇用率：2015年 初等教育：2015年 高等学校：2015年

アマゾン地域へは戦前から戦後にかけて9,932人の日本移民が渡っており、現在は4万人前後の日本人・日系人が生活している（汎アマゾニア日伯協会2014）。アマゾンへの移民は1929年にパラ州のアカラーに42家族と単身者9人、合計189人が移民したことがその契機である。サンパウロ州における日本移民の活躍を聞いたパラ州知事は、1923年に土地の提供を日本政府に打診する。これに応じた日本政府は、政府機関だけでなく財界にも呼びかけアマゾン移民を模索する。なかでも中心的役割を担ったのが、鐘淵紡績会社である。1928年に同社が中心となって設立した南米拓殖株式会社は、現地法人を通じてパラ州に5箇所の移住地を開設した。また、トメアス移住地の前身となるアカラー移住地の運営に乗り出し、1929年から37年にかけて2,100名の移民が移住した⁴。

その他にも、隣接するアマゾナス州にも日本人移民の誘致が行われている。1933年には三井、三菱、住友、安井といった財閥がアマゾニア産業株式会社を設立、教育機関としては日本高等拓殖学校（旧国土館高等拓殖学校）が開校するなど組織的な移民が行われた。低迷したゴム産業の代替作物として、日本人移民が持ち込んだジュート繊維が大成功するなど、目覚ましい活躍を果たした。

ブラジル北部州における積極的な日本人移民の誘致は、移民を送り出したい日本政府と移民を求める北部州の利害が一致したことで生じた。第二次世界大戦を前にブラジルのナショナリズムが高まっており、日本移民を主に受け入れてきた南部州は移民募集を打ち切るだけでなく、移民排斥の兆しが見え隠れしていたこともアマゾン移民を後押しした。

こうした傾向は、戦後も継続していくことになる。第二次世界大戦後、日本

政府は政治的・経済的な窮状にあったが、その対策として海外移民を全面に押し出している。1957年に戦後初めて発行された『外交青書（旧わが外交の近況）』では、移住外交の推進を掲げ以下のような文言がある。

わが国がこの問題を解決するためには、日本自身の経済基盤を拡大強化して産業を高度化し、人口扶養力を増大してゆかねばならぬことはいうまでもなく、さらに日本人自身が身につけた高度の技術を世界の低開発地域の開発に役立たせ、彼我相共にその利益を分つことができれば最も理想的な方策というるのであろう。海外移住が今日最重要施策として取り上げられなければならないゆえんはここにあるわけである。

（外務省 1957）

この『青書』では移民政策の推進とともに、既存の日本人移住地に注目し、支援の必要性が打ち出されている。こうした政策のもと、1953年にはアマゾナス州にジュート栽培の移民が移住、トメアスにも129名が移住している。1954年には外務省の外郭団体である公益財団法人日本海外協会連合会が設立し、1956年にはアマゾン支部が発足している。海協連の目的は移住の送り出しと、移住地での経済面、生活面の支援であった。その後、海外移住者の移住地確保を目的とする日本海外移住振興株式会社が1955年に設立、1963年に両団体を統合する形で、外務省の特殊法人として海外移住事業団が発足している。その理念は、海外移住事業団と海外技術協力事業団（1962年設立）を母体として1974年に発足した国際協力機構（JICA）にも継承されている⁵。

このように日本の政策的な位置づけを有するアマゾン移民であるが、熱帯農業に関する知識・経験不足から、運営には大きな困難が生じた。とりわけ、グアマ移住地で行われた米作は、マラリアの蔓延など多大な被害が生じた。政府の移住派遣の焦り、不明確な移住計画は広く批判的となった。「緑の地獄」とも称されたアマゾン開拓は、日本政府による棄民政策として批判される一方、日本移民はパラ州の成長に大きく寄与した。日本移民が開拓したトメアスを中心に、胡椒の栽培に成功したことで大農業主も誕生し、熱帯雨林を活用した新農法の確立、熱帯果実のジュース工場など、日本移民はパラ州を牽引していった。

こうした農業的成功は、移民の尋常ならざる努力によるが、日本からの経済支援や人材交流もこれを後押しした。

以上のように、サンパウロ州・パラナ州といった南部州とは違った日本人移民の歴史を形作っている。それは戦後も移民が移住地に継続的に流入していたことで、いまなお移民1世が数多く生活していること。移住地開発のイニシアチブを日本政府や経済団体がとり、継続的な支援を続けていること。エスニック・ビジネスと呼びうる日本人中心の農業団体の存在。そして自助グループとしての日系諸団体・日本語学校・日本人設私立学校が活発に活動していることである。

「アマゾン移民」とは、どこかエキゾチズムに裏打ちされた「特殊な地域」であるような印象を抱かせるかもしれない。しかし、以上のような経緯を振り返るとき、アマゾン移民とは(1)日本政府・財界が中心となった政治的な歴史を有するとともに、(2)失敗と成功の歴史は、日本との交流の断絶というよりも、継続的な人の流れを意味していた。(3)ただし、北部地域の経済は厳しい状況にある。経済的な基盤整備の不足から、南部州のように日系企業の海外進出の地とはなり得ていない⁶。

4.2 デカセギが構成する(場)

アマゾン流域の日本移民は当初より農業に従事していた。土地を購入し、住居として小屋を建て、熱帯雨林を切り開いた。トメアスなど日本人移住地の利点は、農協を中心とする経済的連帯だけでなく、文化協会、日本人学校や日本語学校を通じて、日本人向けの教育を行えたことにある。それでも、多くの移民は子どもたちの将来と教育を考え、都市部の中等学校、高等学校に子どもたちを通わせている。そうした子どもたちのために、ベレンの日伯協会には学生寮が併設されていた⁷。

僕は中学校になってすぐベレンにでてきて。中学校ありましたけどね。トメアスにも。でもやっぱりベレンのほうが(良い教育が受けられる)。

(オーガニック店店主)

1980年代から1990年代を中心に、南部州と同じく、パラ州からも多くのデカセギが日本へ渡った。当時の主力農産物は胡椒であったが、政情の安定を取り戻しつつあったアジア圏においても生産が始まると、世界的な胡椒価格の下落が進んだ。また、胡椒の栽培は投機的な側面がある。根腐れ病に侵された胡椒が全滅すると、たちまち経営が行き詰まる農家が出てきたという。

北部州では景気が行き詰まると、職を求めての南部州に渡ることがある。ところが当時はブラジル全土の経済が失調していた。他方、日本はバブル景気に湧いており、ベレンにも旅行会社が開業しデカセギ希望者の募集をはじめていた。プッシュ要因としての経済不況と、プル要因としてのバブル景気を背景に、多くの日本移民とその子弟が日本へ渡った。

一番最初は農業の不振から行って、それから今度は奥さんたちが向こうで、看護の仕事とかそういうので行ったりとか、ものすごく変化してきてますね。(中略)イメージ的には、最初はデカセギ、お金がなくなって、要するに出稼ぎですよ。ですから、移民の社会というのは、成功者という、勝ち組というのはお金をつかんだ人ですよ。だから、そういったことから、単純にお金がないとか、お金に困った人が行くというのがデカセギだったわけですよ、最初はね。

(日伯協会副会長)

熱帯雨林の移住地において、単年の結果で生活が左右されないための経済的余力を誰もが有していたわけではない。そのためデカセギに渡った人は、相対的にみれば経済的状況に恵まれない人びとであり、「農業に失敗した人」といった目でみられることがあった。日本へとデカセギに渡った日系人の総数は把握されていない。本研究での調査対象となった日系団体では、おおよそ日本人移民・日系人の4割程度がデカセギとして日本へ渡ったと語られている。こうした移民ブームは80年代後半から90年代にかけてアマゾン流域でみられた。それではデカセギはどのように評価されているのだろうか。

経済的に一番不振なときに、日本っていうおかげで、本当に助かったんで

しょうね、おそらく、ものすごく助かったんですかね。負の面もあったけど、非常にそれ以上にプラスの面があったんじゃないですかね。

(日伯協会副会長)

ブラジルを覆った不況は、ただでさえ厳しい生活状況にあったアマゾンの日本移民を苦しめたが、デカセギによって生活を立て直すケースも少なくなかった。

デカセギから帰国した若者は、帰国後どのような状況にあるのか。サンパウロをはじめとする南部州の日本企業において⁸、日本での教育経験を有する若者が就職するといった状況が見受けられるものの（ハヤシザキ他 2015）、ベレンでは聞くことができなかった。インタビューを概観したとき、日本企業が若者の就職先にならないのも、そもそもパラ州の州都ベレンに進出している日本企業は3社と少ない。2016年に開催されたサッカーワールドカップ、同じく2016年リオ・デジャネイロオリンピック以後、世界的な経済失調の影響もありブラジル全土が経済的な危機に瀕しており、日本企業は税的優遇がうけられるマナウスに進出しているからである。

帰国した若者を日系人団体が雇用するケースはあるのだろうか。インタビューに訪れた日本人が設立した学校（ブラジルの私立学校）は、日本語や日本文化を教えることが特徴である。日本語学校も併設し、週末になると多くのブラジル人が日本語を勉強する。教師は、日本から帰国した若者である。しかし、日本語教師を続けていくだけでは生活が成り立たないという。

日本語教師だけをやってたんじゃ、なかなか生活をしていかれませんのでね。だから女性の場合はまだ、まだまだですけど。男性の場合は日本語教師だけでは。

(日伯学校 校長)

この学校では日本語を教える一方で、日本帰りの若者にポルトガル語を教え大学に進学するようにアドバイスしており、次節で検討する若者も教員経験がある。校長が大学進学を勧めるのも、ブラジル全土で就職の際に学歴を求める

傾向がみられるからである。デカセギから帰国したオーガニック店店主は次のように語っている。

店主：ここで大学でないと。いい仕事にもつかないし。どうしても大学。最低でも大学出ていたほうがいい。僕なんか後悔してますよね。大学行かなくて。

調査者：やっぱり資格がないとできないことが多い。

店主：そうですね。やっぱり給料も全然違うしね。どこの、日本でもそうですけどね。いい仕事にあおうと思うとやっぱり大学は出ておかない。

(オーガニック店店主)

したがって、帰国した若者にとって日本移民・日系人による商店や学校は就職先というのではなく、ブラジルでの生活に慣れるためのクッションのような存在となっている。日系人団体を経由して大学に進学し、ブラジルの会社に勤めるというキャリアコースが最も安定的な生活になると考えられているのである。

安定志向の背景には、デカセギでいくら貯蓄しても独立することが難しいという事情がある。デカセギ資金を活用した起業は多いが、ブラジルの不景気に加えて、そもそもの商経験の低さや、商慣習の違いから継続的に経営することは難しい。それはベレンにおける商業でも、トメアスにおける農業でも同様である。

また、日本での就労経験を有する若者にとってブラジルで働くことは、起業の難しさ以外にも葛藤があるという。デカセギ後、ブラジルで食品店を開業した店長によると、工場での仕事に慣れてしまっていると、ブラジル特有の職務上で求められるフレキシブルな振る舞いができず苦勞してしまうという。

日本から帰ってきた人というのは、日本の命令された、それだけやればいいという感じのあれに慣れてしまってくるんですよ。だから、ほとんど、自動車会社とか、いろんな工場に行くと、もうそれにみんな慣れてしまっているから、時間が来たら、ああ、8時になったら、じゃあ、はい、仕事

始めて、10時になったら、ちょっと一服してみたいな感じでね。もうその時間だけをただ仕事したらいいといわんばかりの感じで帰ってくるんですよ。

（食品店店主）

景気も政治も不安定で給料も低く、働き方にも違いがある。日本から帰国し起業・独立したとしても成功することは難しい。就職するにしても学歴が必要となる。こうした重苦しい状況の打開策の一つが、日本への再デカセギである。デカセギブーム時に比べて減少傾向にあった斡旋会社も再開業し、再デカセギのケースもみられるようになってきているという。

新聞とかの広告もあるみたいだし、インターネットでやっぱりフェイスブックとかで募集したりしてます。で、実際、航空会社、旅行会社のあれがね、去年、おとしあたりまではすごく大変だったみたいだけど、去年から今年にかけて、ずっとよくなってきているということです。やっぱりデカセギとか、そういうので。

（食品店店主）

領事事務所においても「デカセギに行くという査証の申請は多くなっているのかなと思います（領事事務所職員）」といった語りが聞かれた。

このやっぱり2年ぐらい経済的にすごくもう底ですよ。結構調子良かったんですけどね。やっぱりちょっと不安ですよ。今それで政治的な汚職の問題が出てきてて、これがかなり足引っ張ってますよね。やっと今、信頼回復がやっと起きつつ、ちょっと起きつつあるというふうなことなんで、まだまだ1年ぐらい時間かかると思いますけど。だって1千万人以上が失業してますからね、全ブラジルで。結構大変だと思いますね。

（日本領事館 領事）

以上のように概観すると、「悲劇的なデカセギの歴史」のようなものが、現在

もなお継続しているかのようにみえる。確かに厳しい自然環境と経済開発に取り残されたアマゾン流域部において、日本移民・日系ブラジル人は政治や景気に翻弄され続けてきた。移動を繰り返しながらの生活は、さながら「根無し草」のようでもある。

しかし、移民国家ブラジルにおいて人が流動することとは、日本移民だけでなく、ポルトガル移民、イタリア移民、ドイツ移民等々、が繰り返してきた生活スタイルである。いわゆる母国だけでなく、アメリカ合衆国へ渡る移民も多い。サンパウロまで2,000km以上の移動を経て仕事を求めることと、海外に仕事を求めることに大きな違いはない。商工会議所の副会頭は「デカセギという言葉がですね、もうだいぶん古い言葉であって、出て稼ぐんじゃないんですね」として次のように語っている。

世界に住んでる日本人というのは一応、国際人。私も住んで60年近く外地に住んでますね。彼もおそらく同じでしょう。だから時代は刻々に変わってる。昔と違って世の中、ぐるぐる変わっていつてますね。だからデカセギ問題ですね。日本にデカセギ行くんじゃない。日本で働く場。という感覚になってると思いますね。デカセギというのは出て稼ぐんですから。では日本でなんで就職したらいけないのか。

（商工会議所 A副会頭）

ブラジルから日本へのデカセギは30年以上の歴史を有し、デカセギの「負の側面」が語り尽くされた今日にあって、デカセギを悲観した行為としてみるのではなく、隣町で働く感覚としてデカセギを語る。かれ／かのじょからすれば、1地点で生活を構築していく理由はない。こうした語りが聞かれるのも、「出生地や経済的中心部で働くこと」と「外国で働くこと」の天秤が釣りあうからである。

そしてこの天秤は、近年より平行に近づきつつある。前項でみたように、アマゾン流域部の日本人移住地がその経緯から日本との紐帯を維持し続けてきたことで、人と金と情報が止めどなく流れ続けてきた。日本の就労可能なビザをもつ日系人にとって、あるいは日本国籍を有するブラジル在住の日本人にとっ

て、安価な航空券やICT技術を背景に、両国のトランスナショナルな社会空間は限りなく身近な〈場〉となっている。

ただしアマゾンの自然環境は、日本移民に安定した生活を許さなかった。生活環境が厳しい〈場〉としての側面がある一方で、それゆえに〈場〉を利用したチャレンジが必要となる。一般的に「安定」とは、一定の収入を伴った仕事に就き、定住することとされる。日本移民・日系人大農家や成功した商店主らはデカセギに行くことはないが、他方で、その息子や娘は世界中で生活している。移動に身をおくことは、選べるキャリアの構築方法のひとつであり、生活上のリスクを軽減させる方法となっている。

以下で見るように「不安定」な生活状況にある若者は、生活の「安定」を求めながらも、必ずしも「定住」を目指すわけではない。アマゾン流域部の〈場〉において、日本経験を有する若者が選ぶう選択肢は、日本・ブラジルと多い。したがって浮かび上がる論点は、若者はいかにしてアマゾン流域部でチャレンジしようとしているのか、そしてそのチャレンジがどのようなものであるか、である。

5. 移動とともにある生活——日系ブラジル人の若者の「再チャレンジ」

以上のパラ州の状況を踏まえた上で、アマゾン流域部の若者の再チャレンジのあり様について、現在パラ州在住の20代の日系ブラジル人5名から得たインタビューデータを分析する。5名の若者の詳細について、表3にまとめた。かれ／かのじょらは、日本生まれもしくは幼少期に日本に渡り、日本の小学校、中学校に通った経験を持つ。5名は全員、パラ州に住む日本経験者で構成されるグループのメンバーである。パラ州内にある日本語学校の同僚・元同僚であったり、日本語教育のJICA研修に参加したことで知り合ったりと、全員ブラジ

表3. パラ州日系ブラジル人若者インタビュー協力者

ミゲウ 男性 28歳	
経歴:	ブラジル生まれー2歳のときに渡日ー保育園卒園ー小学校卒業ー中学校卒業ーブラジル帰国ー公立中学校3年生(2年間)ー高校卒業ー再渡日、3年間アルバイト・工場勤務ーブラジル帰国、日本語教師・不動産業・日本語教師
現在:	不動産業(貸家3軒・テナント5軒・アパート5軒)を営む。ほかに日本語の個人授業と土曜日に日本語学校での日本語教師をしている。平日に市役所で働けないかと応募し結果を待っている。将来はブラジルの不動産を管理しながら日本へ行ったりベレーで不動産を買ったりして事業を展開するつもりでいる。

エレーナ 女性 23歳	
経歴:	日本生まれー小学校卒業ー中学校卒業ー中学校卒業後の6月ブラジル帰国ー日本語学校教師・秘書・日本語学校教師・日系団体経営病院受付・通訳 ※日本では転校多数で中学校は不登校傾向
現在:	日系団体の経営する病院で勤務(受付・通訳)。将来は、日本ヘデカセギに行き資金を貯めて、ブラジルで車と家を買いたい。平日夜と土曜日の仕事後、日本語の個人授業をしている。
ラウラ 女性 22歳	
経歴:	ブラジル生まれー1歳半で渡日ー保育園卒園ー小学校卒業ー中学校卒業直前の冬休みにブラジル帰国ー帰国10か月後中学校3年生(4か月間)ー高校卒業ー大学
現在:	国立大学教育学部と私立大学建築工学部在籍。将来はフリーランスの建築士で生計を立てながら自分が通う国立大学に日本語学科を再建することが夢。高校1年生のときから現在まで日本語学校で日本語教師をしている。
サムエル 男性 27歳	
経歴:	ブラジル生まれーブラジルの小学校入学ー2年生の途中で渡日ー小学校卒業ー中学校2年生の夏休み終了前後にブラジル帰国ー中学校卒業ー高校入学ー高校1年生の途中で再渡日ー2年間工場勤務ーブラジル帰国後、高校再開ー予備校(1年間)ー大学(カナダに1年間国費留学)
現在:	国立大学で農学を専攻。将来は稼げるのであればどの国でも良い。家族のために会社を立ち上げ経営したい。土曜日の午前中に日本語学校で日本語教師をしている。
マルセロ 男性 22歳	
経歴:	日本生まれー5歳でブラジルに帰国ー小学校入学ー小学校1年生の途中で再渡日ー小学校卒業ー中学校卒業ーブラジル帰国ー高校卒業ー大学
現在:	私立大学でコンピューター工学を学んでいる。将来は日本の大学院に留学し、帰国後にコンピューター工学の分野で日本とブラジルをつなげる会社を起業したい。大学に入学後、土曜日に日本語学校で日本語教師をしている。

ルでの日本語教師経験者である。

5.1 アマゾン流域部に暮らす若者たちの将来展望

はじめに、アマゾン流域部に暮らすかれ／かのじょらが調査時に自らの将来展望、すなわち今後のチャレンジをいかに描いていたかを明らかにしよう。

ブラジルに帰国後、再び日本へ行った若者2名(ミゲウ、サムエル)も、そのままアマゾン流域部に暮らす若者3名(エレーナ、ラウラ、マルセロ)も将来渡日する可能性を保持しながら職業達成を思い描いている。しかし、5名とも日本に定住する未来ではなく、ブラジルも日本も他国すらも生活の場の一つの選択肢としてグローバルに生きることを志向したり(ミゲウ、サムエル)、渡日の可能性はブラジルでの生活をより豊かにするものとして考えブラジルに軸足を置いて生活することを想定したりしていた(エレーナ、ラウラ、マルセロ)。

グローバル志向の2名は再渡日の経験があり、その際は日本で工場労働をしていた。サムエルは日本も職業達成の場として選択肢に入ってはいるものの、

留学ではなく働いたことがあるからこそ悪いところが見えていると語り、積極的な選択肢としては想定されていない。カナダに留学中にアルバイトをした経験も踏まえて、日本とカナダを天秤にかけた場合カナダのほうが良いと話した。そのうえで、サムエルは日本語力や大学で専攻している農業の知識が生かせる場があれば良いが給与が良ければどこでも良いと言い、さらに根を張らないところが自分の良さだとも語っている。

調査者：どこでも仕事があればという。

サムエル：はい。そうなんです。そこが多分、僕のいいところでもあって、前、兄と話したんですけど、僕たちって、根を張らないんですよ。

(サムエル)

一方ミゲウは、帰国後の学校生活で苦労したことから大学進学を選択せず日本へデカセギに行った。デカセギで得た資金を基にブラジルで不動産を買い現在アパート等を経営している。ミゲウにとって日本はブラジルにとっても自分にとっても先に行く未来であり、ブラジルがその未来にむかって成長し続けているからこそ自分も成長しなければならないという。

ブラジルが成長してるんで、現状維持だと抜かれるんです。だから成長と同時に自分もいかなきゃ。

(ミゲウ)

グローバル志向の2名に対して、エレーナ、ラウラ、マルセロの3名はブラジルを生活の基盤とした将来を描いている点で軸足志向といえる。エレーナは現在日系団体が経営する病院の受付・通訳をしており、日本語しか話せない人が病院に来るのは少ないというものの、通訳をすることで人に頼られるのがとてもうれしいという。日本にいる家族からは日本でも通訳担当者を探しているから日本に来たらと誘われており、将来の選択肢のひとつとしている。ラウラは将来フリーランスの建築士をしながら現在自分が通う地元の国立大学に日本語学科を再建する手伝いをしたいと話した。マルセロは、現在大学卒業後に

日本の大学院へ行くプログラムに申し込んでおり、修士課程の2年間と可能なら博士課程の3年間の計5年間は日本で生活するつもりでいる。しかしその後はブラジルに戻り、日本で得てきたコンピューター工学の知識や技術をブラジルで生かしていく働き方をしたいと語る。3名はそれぞれに、日本へ行くことを視野に入れてはいる。しかしそれでもブラジルを生活の基盤とする理由として、ブラジルに家族がいること、もしくは日本で働く場合には工場労働になる可能性があることを挙げた。

あー（日本に）帰りたいけど。日本にずっと住んでたら、ずっと工場で働くことになるし、親とまた同じだし。日本にいったら家も買わないだろうなと思って。

(エレーナ)

5名はそれぞれに日本で暮らした経験とその間に得た日本語力や人脈、そして日系ブラジル人として日本で暮らすことの意味をもとにしながら、日本に行くことを自らの将来を切り拓く手段として位置付けてはいる。しかし日本に行くことはあくまで再チャレンジのプロセスを構成する要素の一つであり、日本を唯一かつ最終的な職業達成の〈場〉としたいわけではない。こうしたアマゾン流域部に暮らす若者たちの戦略は、どのような〈場〉の文脈から生まれたのだろうか。

5.2 日本での経験と望んだわけではないブラジルへの移動

5名は全員、日本の小学校、中学校を経験しており、日本のブラジル人学校⁹に通った者はいなかった。日本の学校での楽しかった記憶の一つとして全員が中学校での部活動を挙げていた。たとえばマルセロは野球部に入り、「部活、部活、部活ぐらい」中学校生活の中心に部活動があったという。サムエルも中学校時代に一番打ち込んだのは部活動（剣道）だったといい、部活が楽しかったから、中学に行ってたようなものだと話している。嫌がらせを受けたりや集団で無視されるなどの経験をしている人たちもいるものの、深刻なものとしては語られていない。

5名がブラジル帰国前に思い描いていた中学校卒業後の日本における進路は、一様ではない。ラウラとマルセロは日本で高校、大学と進学することを漠然と思い描いていたという。エレナは日本語での日常会話は不自由なかったものの、頻繁な引越しと転校によって学習についていけなくなり、家庭の事情もあいまって中学校にはほとんど通わなかった。また家の経済的事情を考えて高校進学ができるとは思っておらず、中学校卒業後は働くことを考えていたと話している。サムエルも、日本語はできたけれど当時は勉強嫌いで高校進学は考えられなかったという。

調査者：何が難しかったんでしょう。読み書きはそれなりにはできたわけですね。

サムエル：はい、できました。多分、僕が思うには、理解ができてなかったと思います。やっぱり読み書きをするということと、理解するということは全然違うじゃないですか。

(サムエル)

ミゲウは、中学校1年生のときに自身が中学校を卒業したらブラジルに帰ると家族で決めていたため、日本での進路のことはまったく考えず、ブラジルでも学習することになる英語や数学は取り組んだけれども日本史には身が入らなかったという。自分の生まれたブラジルへ帰ることは楽しみなことであり、日伯の辞書をもって学校へ行っていたとも語った。

以上のように5名は、日本語力や日本人の友人・クラスメイトとのつながり、部活動の経験などを得ながら日本で生活をしていた。そのようななか、中学校の卒業前後に家族の都合でブラジルへ帰国することになる。ラウラとエレナは、短期間の一時帰国のつもりだったものが、ブラジルでの状況の変化でそのまま再渡日することなく現在に至っている。また、中学校卒業後の帰国が楽しみだったミゲウに対して、マルセロは中学校卒業後もなんとか自分だけ日本に残る手立てを探したものの見つからず、卒業までは日本にいさせてほしいと懇願し、その自分のために父親が日本に残って必死に働く姿を目の当たりにする。中学校2年次の途中で帰国したサムエルは、学校での勉強に嫌気がさしたこと

と両親が日本での働き方に疲れたことが重なり、家族で帰国することになっている。

以上のように、すべての事例が親の都合などによって帰国することになった。日本で暮らしていたことも自らの選択ではなく、ブラジルへの移動もまた自らの選択ではない。ポルトガル語もできない。幼少期から日本で積み上げてきた経験はブラジルへの移動によっていったん分断されたかのようにみえる。この分断こそ、1節で述べたように単一拠点で学習できないことやアイデンティティ形成を阻害する「機会喪失」「リスク」として国家間移動がネガティブ捉えられる要因でもあろう。しかし5名の若者は、5.1で明らかにしたように日本への再移動も視野に入れつつ、それぞれの再チャレンジを試みている。そうであるならば、移動によって経験が分断されたかのようにみえる子どもたちが若者へと成長するなかで、どのようにブラジルでの生活を形づくっていったかを明らかにする必要がある。

5.3 ブラジル帰国後の再チャレンジ

5.3.1 ブラジルの学校を通じた再チャレンジ

ブラジルに帰国した当初、全員がポルトガル語での読み書きができず、日本でも家庭でポルトガル語が話されていた場合は、聞くことはできるという程度だったと語られた。そのため、ブラジルでの学習に全員が困難さを感じたと話す。

マルセロは、1年先に帰っていた母親が高校入学の手続きを済ませており、ブラジル帰国後2週間で高校へ通い始めている。授業には出席し板書されたものを写しはするものの、まったく理解できないでいたマルセロに対し、帰国した日系人生徒を受け入れたことのある教師がボランティアで週に2回ほど午後には補習をしてくれたという。しかしそのことで授業が理解できるようになったわけではない。

高校3年間、テストとかもやったんですけど、成績もそんなによかったわけじゃないし、中の下ぐらいなんです。でも、一応、通ったっちゃ通ったんですけど、高校3年間、勉強した内容というのは、全く今でもわかんないです。

(マルセロ)

それでも、5名の若者のうちラウラ、マルセロ、サムエルの3名は現在大学在学中である。

日本で転校の繰り返しなどでとくに中学校に通った時間が短かったエレーナは、ブラジル帰国後、基礎教育課程をはじめから受けることにした。

(日本に)帰れない。どうしようとぶらぶらしてて。夜、学校はじめて。夜間。小学校から。一応やるかっていう。ポルトガル語わかんなかったんでぜんぜん。小学校からやって。あとなにも書類とかもってきてないじゃないですか。遊びにきたから。だから、卒業しましたという証明書もないから。最初からやって。別にブラジル、ポルトガル語わかんないから別にいいかなと。

(エレーナ)

その後、高校卒業資格を取得できる試験の受験や通信教育の受講を経験しながら、エレーナは現在、短期間で高校課程を修了できる学校へ入学する手続きを進めていた。

日系ブラジル人の若者の教育に関する再チャレンジについては、これまで児島・中島(2015)などが基礎教育・中等教育の修了認定機能をもつ全国青年成人能力証明試験(ENCCEJA)などブラジル固有の教育制度が肯定的に作用していると報告している。今回のパラ州の事例でも、日本での教育経験が長くポルトガル語に困難さを抱える若者が、ブラジルで教育の再チャレンジを果たすために、学年を下げての編入学、資格試験、通信制教育など多様な教育制度を利用している様子がうかがえる。

5.3.2 再渡日経験と再チャレンジ

ブラジルに帰国後、様々な事情から再デカセギする。こうしたケースでは、定住できる資源が乏しいゆえに、厳しい生活状況にあることが想定されるが、本研究ではむしろ日本への再渡日がさらにその先の再チャレンジとむすびつい

ていく様子が見受けられた。サムエルはブラジルで高校入学後に家族の都合で再渡日して日本で工場労働を経験している。先述したとおり、日本で小中学校に通っていたときには高校進学を考えていなかったサムエルは、再渡日時には働きながら独学で中学校卒業程度認定試験および高等学校卒業程度認定試験を受験した。高等学校卒業程度認定試験を受験した際の会場が大学で、自分と同じ年齢の人たちがこういうところで勉強しているんだと実感したことで、大学進学のアスピレーションが高まったという。

大学でテストをやりに行ったときに、その大学に感動したんですね。キャンパスのところに。ああって言って、よくよく考えてみたら、もう18歳じゃないですか、そのときで。ああ、みんな、こういうところで勉強してるんだって感じて見たら、ああ、自分もこういうところに行きたいなって感じで。

(サムエル)

ブラジルで不動産業を営むミゲウは、デカセギで再渡日していた間に出会った中学校の同窓生たちから大いに刺激を受けたと語った。

その時僕が23歳かな。23歳ぐらいかな。それで日本の23歳って言ったら、もう大学終わってて就職してる人もいるし、子どもいる人もいるし。それこそハリウッドで歌手、俳優やってる人もいたし。中国で留学してる人もいるし、ハーバードで勉強してるやつもいると。ものすごいなんか差を見せつけられたんです、僕は。

(ミゲウ)

デカセギ期間の日本の状況もミゲウにとってはプラスに働いた。ミゲウは再渡日のデカセギを資金集めと定めており、約4年間の滞在期間のうちの3年間は集中して資金を集めると決めていた。その期間がちょうど東日本大震災があった時期と重なり、自動車関連業界の工場は夜間の勤務ということで、残業もあわせて月に相当な給与を得ていたという。さらには、この資金を経済成長期にあったブラジルにドル建てで投資することを考えていた時期に、一緒に工

場で働いていた日本人同僚に誘われ、ある企業の社長と食事をともにした際に「不動産業」のノウハウを教わった。このとき社長に教えられたことは今でもミゲウの投資の指針になっているという。

日本でデカセギについて、サムエルとミゲウは肯定的に語っている。過去、自分の意志ではなく帰国することになったため、同級生との再会などを通じて日本への想いを強くした。それでもなお、日本だけにチャンスがあるとは考えていないという。サムエルとミゲウはエレナと同様に、中等教育段階を終えた年齢になったいま、日本で暮らし生活する手段として、デカセギ労働するという以外に選択肢があるとは思っていない。それでは「チャンスがない」と語る。サムエルはそういった日本の状況を理解しているために、日本で大学に進学しようとは考えていない。またミゲウは体を動かし健康的になるし投資のための資金を得られるのでという理由から、デカセギ労働を肯定的にとらえているものの、あくまでブラジルおよびペルーなどの第三国での事業拡大の手段と捉えている。つまり、ブラジル軸足志向の若者もグローバル志向の若者も生きていくというプロセスのなかで選択しうる〈場〉として日本を想定しつつ、日本にとどまらずブラジルまたは他国への再移動を思い描いている点で、アマゾン流域部の若者にとって再チャレンジを果たす〈場〉は常に複数に開かれていると認識されているのである。

5.3.3 再チャレンジを支える日系資源

今回の調査で多く聞かれたのが、日本にはいくらでも仕事があるが、パラ州では大学に進学しないと良い仕事には就けないという語りである。かれ／かのじょらが言う「良い仕事」とは収入の良い仕事とほぼ合致する。こうした状況下でのかれ／かのじょらの再チャレンジを支える資源が存在していた。

今回の5名の若者の教育達成および職業達成に対して、日系団体が一時的な資金獲得の役割を担っている様子がうかがえた。とくに日系人が経営する日本語学校における日本語教師の仕事は、日本語学校経営者自身が語っているように生計を立てる手段にはならないものの、学生アルバイトや生計を得る仕事が見つかったり安定したりするまでの一時的な資金獲得の手段として、全員に認識されていた。日本語教師の仕事は自分の日本語力を生かせるという理由や日

本語を忘れないためにという理由で始めたという側面も聞かれ、また日本語教育を通して地元の次世代を育てたいという思いも複数名から語られた。そうした言語文化的側面と同時に、日本から帰国した若者の教育達成・職業達成の過程で日系団体が一時的とはいえ重要な役割を担っているのである。

またとくに大学に進学したラウラ、サムエル、マルセロの3名は自らが専攻している学科と直結した仕事によって生計を立てていく未来像を描いており、いずれも実学・実業的な将来展望を語っている。加えて、現在高校卒業資格取得を目指しているエレナをのぞく4名からは全員、起業するもしくはフリーランスで生計を立てるという語りも聞かれた。

ミゲウは現在すでに不動産業が主たる収入になっている。またマルセロとサムエルはともに、起業し家族や友人と会社経営をすることを目指している。マルセロは、両親からブラジルでは工学をやりなさいと言われ、大学でコンピューター工学を学んでいる。日本から新しいテクノロジーをブラジルに持って帰ってブラジルの理工学関係の技術を改善する仕事に就きたいと将来を描き、その際には友人の右腕になって起業するのが良いと語った。サムエルは、家族が農業を家業としているので農業大学に入り、今学んでいる農業の知識・技術と日本語をいかせる仕事がしたいと言う。そしてもっとも重要なのは金銭だと明確に述べていた。

みんなにももうずっと言ってるんですけど、目的は幸せになって、金持ちだから。正直、お金のために勉強しているようなもんなんで、そんなところですね。

(サムエル)

サムエルが金銭面を重要視する理由には、母親や兄弟の生活を自分がなんとかしなければいけないという思いがある。4.2で述べたように、パラ州には日本企業が3社しかなくまた日系企業はあるものの商業が中心であり、日本帰りの若者を多く雇用する体力はあまりない。また、パラ州の日系企業・商店・病院の顧客の8割は非日系人であり、ブラジル社会のなかにかにり込んで生き残るかが常に問われている社会的現実がアマゾン流域部にはある。つまりかれ／

かのじょらにとって自分たちの日本での経験や日本語能力という日本で得てきたトランスマイグランドとしての資源は、アマゾン流域部という〈場〉で生かせればよいが、それだけに頼って職業選択をする道は現実的でないと解釈されている。しかし、前項で見たように日本に渡るには「デカセギ」が最も現実的なものとなる。こうした葛藤のなかで〈場〉に即した生活を構想する必要がある。今回、それを身近で支えてくれる人の存在があったことが語られた。たとえば、サムエルとマルセロは進学に関しておじや父親の経済的支援が大きいと話した。サムエルはブラジルで高校入学後に家族の都合で再来日して日本で工場労働を経験している。サムエルに帰国後もう一度高校へ通うための援助をし、ブラジルの国公立大学を目指すよう助言してくれたのがおじだったという。

毎回、おじさんが言ったことが頭のほうによぎって、おじさんが言うには、やっぱりお金持ちの人っていうのは、お金持ちの人の子供だったら大学は何をやってもいいんですよ。お父さんかお母さんかしらないけど、何とかしてくれるから、仕事を。でも、貧乏な人は、お金になることをやらなきゃいけないと言われて(後略)

(サムエル)

現在暮らすアマゾン流域部は自分たちが獲得している資源を充分にいかす〈場〉として想定するのが難しく、ただだからこそ日本への渡航を再チャレンジの手段として保持し続けるという状況のなかで、5名は現在の苦労を吐露することはあっても、将来展望を悲観的には語らない。困難さがありつつも〈場〉に合わせた生活設計を構想できたのも、5名にはブラジルでの生活を支えるキーパーソンがそれぞれに存在していたからである。

6. 考察とまとめ

アマゾン流域部のパラ州ベレン市・トメアス町において調査を実施することにより、日系ブラジル人の若者の帰国後の再チャレンジの諸条件について、これまで研究対象とされることが多かったサンパウロ州都市部・周辺部とは異な

るありようが浮かびあがった。なによりも大きなちがいは、今回対象とした地域では日本企業や日系企業の数がきわめて少ないため、そうした「日系資源」を帰国後の就職先として見込めないことである。自らの文化的資源を活かせる余地が少ない状況のもとで、〈場〉に即した進路選択がなされるのは必然的な帰結といえるだろう。このように実学・実業を尊ぶ価値観は、世代間で継承されるものでもあった。

「日系資源」のみをあてにできない状況は、日本への志向を強化する傾向にあるという点も本稿で得られた知見である。帰国した若者の将来展望は、ブラジルを基盤とする軸足志向と一国にこだわらないグローバル志向に分岐することが示されたが、軸足志向といえども、将来的に日本で働く可能性を否定するものではなかった。「日系資源」が限られた地方部では、サンパウロのような「日系資源」の豊富な地域以上に、働く場としての日本が、ブラジルでの生活との連続性のなかで直接的に想起される傾向にあるのかもしれない。

このことが示唆するのは、アマゾン流域部に帰国した若者の再チャレンジは、かならずしも帰国先での実践として完結するのではなく、さらなる往還へと開かれたトランスナショナルな実践として展開されうることである。さらに、そのようにトランスナショナルな性格を帯びた再チャレンジのプロセスにおいては、日本に行くことやブラジルに帰ることの意味が移動経験のありように応じて変容しうることも、本研究で得られた重要な知見である。ブラジル帰国後、大学進学などのチャンスを掴むことはこれまでも指摘されてきたが(山本 2014; 児島・中島 2015)、再デカセギが若者の進学意欲を高めるケースがみられた。たとえば、帰国後に高校進学を果たしたものの、家族での再渡日により学業を中断して工場で働くことになったサムエルは、デカセギ先の日本で大学進学へのアスピレーションを高め、再帰国後の進学へとつなげていた。さらに、大学卒業後は日本を含めた複数国での就労の可能性に言及しており、「根を張らない」ことを自らの強みとしている。

それと同時に注目すべきは、「日系資源」が限られた地方部であることを背景に生じるトランスナショナルな実践としての再チャレンジを、親族や日本語学校、日系コミュニティがそのような現実 に即した仕方で下支えしているという事実である。たとえば日本語学校は、日本帰りの若者を日本語教師として雇う

ことで、再チャレンジの過程にあるかれ／かのじよらを一時的であれ経済的に支えるだけでなく、日本語使用やそれにもとづく仲間集団の形成を通じた言語的・文化的資源の存続に貢献し、再渡日という選択肢の維持を可能にしていた。さらに、「日本にデカセギに行くんじゃない。日本で働く場。という感覚になっている」という商工会議所副会頭の見解は、ブラジルの「出生地や経済的中心部で働くこと」と「外国で働くこと」との間に明確な境界線を引くことの無意味さを鋭く指摘するものであった。ブラジル社会を生き抜きながら、同時に再渡日への可能性を開いておくというトランスマイグランドとしての若者の生き方は、こうした日系コミュニティのありようを背景に肯定されるのである。

Skeldon (2012)の整理によると、移住を繰り返すことで生活状況は向上する場合もあれば、低下する場合もあるという。一部では強制的で低賃金な労働に従事させられる可能性もある。しかし、低技能労働者で普遍的な仕事（ポーター、タクシー運転手など）ならば無職になるリスクは低く、移動前よりも高い教育を受ける機会もある。また、ドイツにおける循環移民を対象とした大規模なパネル研究（Constant and Zimmermann 2011）によると、移住時の精神的な負荷は移動を繰り返すことで軽減されるし、生活上の情報量は増加する。しかもそうした資源は世代を超えることで継承され、リスクが軽減される。すなわち、アスピレーションの形成にしても、その達成にしても、一国内に閉じたかたちでなされるものとの想定は、けっして現実的とは言えないのである。

本稿の事例およびこれらの研究を概観したとき、移動の経緯や歴史性、両国間の関係を考慮しなければならないことが理解できる。そうしたときに課題となるのが、トランスナショナルなかたちで生きられる〈場〉を日本側が共有しているか、ということである。たとえばJICAは次世代育成のための各種研修の機会を設けており、今回の調査でも、そうした研修にすでに参加したり、あるいは参加を希望する者がいたが、研修の目的はあくまでも日系社会に貢献する人材の育成であり、日本でも生きていくことを必ずしも想定してはいない。だが、本稿であきらかになったように、現実の日系社会を構成する人びとは、日本も働き生きていく〈場〉とみなしており、そうした認識は世代間で共有されていた。すなわち、日本側と現実の日系社会との間には、日系ブラジル人が日伯間を行き来することに関して大きな認識のずれが存在しているのである。

後者にとって移動は一つの生き方であり、生きる〈場〉は、日本、ブラジル、日系社会、他国など複数の社会によって構成されている。だが他方、前者において、移動はあくまでも「例外」とみなされるに過ぎず、生きる〈場〉はどれか一つの社会に枠づけられたものであり、その他の社会は外部でしかない。そして、日系ブラジル人の子どもに関する教育研究の多くが、こうした「例外」にどのように対処するかという観点からなされてきたと言っても過言ではない。

現実の日系社会の観点に立てば、まったく異なった様相がみえてくる。4節で詳述した通り、アマゾン流域部においては、ブラジル日本移民史における政策的な位置づけに関連して日本との関係が途切れることなく維持されてきた。失敗と成功、そしてそれに付随する継続的な人の流れが歴史を彩っている。森(1995; 2011)は日系ブラジル人のデカセギも、基本的には日本移民の枠組みで捉えることができるとしたうえで、日本移民の末裔という立場を最大限活かした「トランスナショナル・ストラテジー」の存在を指摘している。しかしこうしたトランスナショナルな生き方、教育達成や地位達成について、とりわけ教育研究は極めて限定的な向き合い方をしてきた。

移動にともなう困難をいかに飼い慣らすかという課題に、グローバリゼーションが叫ばれるはるか以前から向きあってきた歴史をもち、現在も果敢に取り組んでいる人びととして日系ブラジル人を位置づければ、デカセギ労働者とその子どもという現在の教育研究の設定自体、視野がせまいだけでなく、両国関係をめぐる緊密で長い歴史への目配りが不十分であるという問題が浮かびあがる。かれ／かのじよらの日本滞在は、むしろ、ブラジル日本移民の始まりから繰り返されてきた人の移動をめぐる長い過程の一コマなのである。人びとは「移動のなかに住まう“settle within mobility” (Morokvasic 2004)」。あるいは、世代を超えて「移動とともに生活してきた」のである。

だとすれば、かれ／かのじよらを一国内への「定住」へと押し込めようとする教育研究や教育実践は、人びとが移動を生活の不可欠な構成要素として生きる現実や、そのようにして生きてきた人びとの長く豊かな歴史の無視ないし否定をとまなわざるをえない。このことは二重の意味で問題をはらんでいる。ひとつは、移動に身をおきながらキャリア構築を試みる日系ブラジル人の若者の可能性を妨げるという点で、もうひとつは、そうした移動が日本社会の内部に存

在し続けてきた歴史、すなわち内なる移動性と出会う機会を人びとから奪う点で。グローバリゼーションの時代においては、移動とともに生活することがどこでも、誰にとっても重要な課題になりうることを考えれば、そのための思考や感覚を鍛える機会を自ら手放すことは、大きな損失と言わざるをえまい。

注

- 1 2017年5月には日本の経産省が主催した合同企業説明会（サンパウロ州／パラナ州）が行われ、多数の日系人が求職に訪れている。筆者の調査からも、各地の旅行会社において2016年前半頃から急速に再デカセギ希望者が増加していることを確認している。
- 2 大使館はブラジリア。領事館はクリチバ、サンパウロ、マナウス、リオデジャネイロ。領事事務所はベレン、ポルトアレグレ、レシフェ。
- 3 日本海外移住振興株式会社の現地法人であるジャミックはブラジル各地で移住地を造成していくが、トメアスにも第2トメアスと呼ばれる移住地を拓いている。トメアスでは熱帯に特化したアグロフォレストリーという農業が主流である。これは収益しやすい植物を単作するのではなく、材木、胡椒、果実を敷地内で多作する手法で、JICAや日本の大学関係者の協力のもと日系人が主導して取り組んでいる。
- 4 アマゾン移民に関する記述はブラジル日本移民八十年史(1991)より。
- 5 JICAや移民を送り出した「県」は研修制度を設け、日系人子弟の受け入れを長く続けている。またJICAは青年海外協力隊やシニア海外ボランティア制度を通じて、日本人と日系社会の交流事業を継続的に行ってきた。その他にもJICAを通じた技術協力や営農支援、アグロフォレストリーの第三国輸出なども行われている。JICAのトメアスにおける農業支援に関しては芳賀(2015)が詳しい。
- 6 ブラジル政府は北部経済のテコ入れのために、アマゾン川上流のアマゾナス州マナウスを経済特区に指定している。マナウスには日本企業が40社ほど進出している。マナウスまでは直線距離で1,200kmほどである。本インタビューでも失業時に、サンパウロに行くか、マナウスに行くか、それとも日本に行くかが並列して語られることがあった。「生活の拠点を移す」ことを考えたとき、国内移動も国際移動も「大きく変わらない」といった考え方があった。
- 7 ブラジル日本移民の教育戦略の典型を示す言葉に「黒い兄と白い弟」という言葉がある(前山1996)。これは親とともに働く長男の肌が黒く焼け、サンパウロなどで勉学に励む弟の肌が白いというものである。末弟や移民2世の多くが農地を継ぐというよりも都市部で大学進学を目指すため、大都市に日本移民向けの学生宿舎・県人会宿舎が建設されていた。
- 8 海外進出した日本企業のことを一般的に「日系企業」というが、ブラジルにおいて「日系企業」とは、日本移民もしくは日系人(移民2世以降)の企業を指す。そのため、日本から進出した企業を「日本企業」とする。

- 9 日本における外国人学校のひとつ。保幼小中高、近年は通信制の大学など、日系ブラジル人集住地域において開校している。

参考文献

アレハンドロ、ボルテス・ルベン、ルンバウト

- 2014 『現代アメリカ移民第二世代の研究―移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』村井忠政・房岡光子・大石文朗・山田陽子・新海英史・菊池綾・阿部亮吾・山口博史訳、東京：明石書店。

小内透編著

- 2009 『在日ブラジル人の労働と生活』東京：御茶の水書房。

外務省

- 1957 『わが外交の近況』
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bluebook/1957/s32-2-5.htm>
(2017/10/20アクセス)

児島明・ハヤシザキカズヒコ・山ノ内裕子・山本晃輔

- 2014 「第IV部 ブラジル人学校」志水宏吉・中島智子・鍛冶致編『日本の外国人学校』pp.220-294、東京：明石書店。

児島明・中島葉子

- 2015 「トランスマイグラントの時代におけるブラジル人青年の教育経験―学校教育と学校外教育の両面から」『地域学論集(鳥取大学地域学紀要)』12(2): 75-103。

スティーン・バートベック

- 2014 『トランスナショナリズム』水上徹男・細萱伸子・本田量久訳、東京：日本評論社。

芳賀克彦

- 2015 「ブラジル・アマゾン地域での日系農家によるアグロフォレストリーの実践と成果」『国際農林業協力』2(179): 28-39。

汎アマゾン日伯協会

- 2014 『汎アマゾン日伯協会 創立55周年記念誌』ベレン：汎アマゾン日伯協会。

ハヤシザキカズヒコ・山ノ内裕子・山本晃輔

- 2013 「トランスマイグラントとしての日系ブラジル人―ブラジルに戻った人びとの教育戦略に着目して」志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶致・ハヤシザキカズヒコ編『「往還する人々」の教育戦略―グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』pp.206-267、東京：明石書店。

ハヤシザキカズヒコ・児島明・山ノ内裕子・中島葉子・山本晃輔

- 2015 「トランスマイグラントの時代におけるブラジル人青年の職業達成」『日本教育社会学

- 会大会発表要旨集録』67: 254-257。
- ブラジル日本移民80年史編纂委員会
1991 『ブラジル日本移民八十年史』サンパウロ：ブラジル日本文化協会。
- 前山隆
1996 『エスニシティとブラジル日系人—文化人類学的研究』東京：御茶の水書房。
- 森幸一
1995 「ブラジルからの日系人出稼ぎの特徴と推移」渡辺雅子編『出稼ぎ日系ブラジル人(上) 論文篇・就労と生活』pp.461-546、東京：明石書店。
2011 「ブラジル日本移民・日系「研究」の回顧と展望—特に人文・社会科学分野を中心にして」『コンフリクトの人文科学 第3号』pp.203-266、大阪：大阪大学出版会。
- 山本晃輔
2014 「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択—移動の物語に注目して」『教育社会学研究』94: 281-301。
- Basch, L., N. Glick Schiller. and C. Suzanton-Blanc.
1994 *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments and Deterritorialized Nation-States*. London: Routledge.
- Constant, Amelie F. and Zimmermann, Klaus F.
2011 Circular Migration: Counts of Exits and Years Away from the Host Country *Population Research and Policy Review* 30(4): 495-515.
- Instituto Brasileiro de Geografia e Estatística
2017 CONHEÇA CIDADES E ESTADOS DO BRASIL
<https://cidades.ibge.gov.br/> (2018/10/16アクセス)
- Kivisto, P.
2005 Social Spaces, Transnational Immigrant Communities, and the Politics of Incorporation. In Kivisto, P (ed.) *Incorporating Diversity: Rethinking Assimilation in a Multicultural Age*, pp. 299-319. Boulder: Paradigm.
- Kearney, M.
1995 The Local and the Global: The Anthropology of Globalization and Transnationalism. *Annual Review of Anthropology* 24: 547-565.
- Levitt, P., and N. Glick Schiller.
2004 Conceptualizing Simultaneity: A Transnational Social Field Perspective on Society. *International Migration Review* 38(3): 1002-1039.
- MacDonald, J. S. and MacDonald, L.D.
1964 *Chain Migration Ethnic Neighborhood Formation and Social Networks*. The Milbank

- Memorial Fund Quarterly, 42(1): 82-97.
- Mcauliffe, C.
2007 A home far away? Religious identity and transnational relations in the Iranian diaspora. *Global Networks* 7(3): 307-327.
- Morokvasic, M.
2004 Settled in Mobility: Engendering post-wall migration in Europe. *Article in Feminist Review* 77(1): 7-25.
- Skeldon, R.
2012 Going Round in Circles: Circular Migration, Poverty Alleviation and Marginality. *International Migration* 50(3): 43-60.
- Tsuda, T.
2001 *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*. New York: Columbia University Press.